

# 第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

## 大和言葉

アメリカ

シカゴ双葉会日本語学校補習校

高等部2年生 島村 莉於

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

古今集に載っている坂上是則が詠んだ「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪」。かるたに魅了されてまだ間もなかった私が、「明け方、月かと思うほど明るい白雪が降っていた」という叙景を詠んだこの首に感動したのを今でも覚えている。そして第一言語としてずっと親しんできた日本語に大和言葉というものがあるのを知ったのもこの歌からだった。

最初は早くかるたを取りたくて、せっかく五、七、五、七、七に思いが込められた短歌も語呂合わせで覚えていた。しかし、まるで体が詠まれる音に反応することができなかった。そこで歌の意味を知るとイメージが湧きやすくと聞き、一から覚えなおした。遙か昔の人が思いを短い文に起こした、単語一つ一つに向き合っていると、今まで見えなかった短歌の深さが感じられた。平安時代の人が技術を駆使した百人一首には、表し方がそれこそ擬人法、体言止め、倒置法と数あるが、私が一番驚いたのは大和言葉だ。句切りごとに分解し「朝ぼらけ」だけの意味を調べると「夜が明けてほのかに辺りが明るくなってくる頃」とあった。今でこそ朝日が出る頃をこのような表し方はあまりしないが、これは今でも使われている大和言葉の一種であることを知った。柔らかく美しい響きが特徴である大和言葉に、「朝ぼらけ」から始まるこの綺麗な音に、知らず知らずのうちに魅入っていたのだ。

日本語を大きく分けると外来語、漢語、大和言葉とあるが、その中でも大和言葉は日本固有の言葉。小さい頃から聞き覚えがある、「おすそわけ」、「おかげさま」、「ときめく」など私たちの周りに数多く存在する。平安時代から使われ約千年以上の時を超えて今につながる大和言葉は日本が誇るべき文化だと思う。昔を生きた人と現代の人が全く同じ言葉を使い続ける国はそうそうないだろう。時や場所は違えど、思いをはせれば私が好きな坂上是則が詠んだ光景と同じ景色が見えそう。日本語の背景には時間を遡り感じることでできる歴史があるのだろう。

私は「ひたむき」という言葉がとても心地良く、いつも自分に言い聞かせている。原点を今まで知らなかったが、これも大和言葉であり、今の私にとっても欠かせない言葉だ。現在アメリカに住んでいる私は、エッセイを書く際などにどうしても「ひたむき」という言葉を使いたくて辞書を引いた。しかし、出てくる言葉は、どうも英語に訳すとぴんとこないものばかりだ。そもそもこちらではその言葉は使わない。存在しないのだと思った。一つの物事に忍耐強く、ひたすらそれに打ち込んでいる様子を表す「ひたむき」。きつと大昔から何事にも真面目に、正に「忍耐強い」日本人だからこそ生まれた言葉なのだろう。世界何か国も使われている英語などに対して、小さな島国である日本にしかない美しい言葉。私はこちらに来てから、これらの美しい言葉を知ることが私たち日本人にとって大きな財産だと思った。現在、私たちは日本語に新たな言葉を生み出したり、できるだけ相手に短く、簡潔に伝えるべく、言葉を省略したりすることが多い。時代と共に新たな言葉が生まれることは日本の一つの文化だと思うが、日本固有の言葉でしか表せない、気遣いや美しい響きが放つ表現もあるだろう。「超」、「めっちゃ」などが使われることがあるが、同じ意味でもこれを大和言葉に言い換えると「このうえなく」と、丁寧さが増す。私は現代までつながり、昔の人の言葉に込めた日本らしさがにじむ、この大和言葉を使って、平安時代を近くに感じたい。